



スロラニユプロジェクト  
現地スタッフ近藤正樹

カンボジアは12月に入り雨季が明け、日中の暑さは相変わらずですが、蒸し暑さは和らぎ、朝夕は涼しく過ごしやすいベストシーズンとなりました。この時期は農村部では稲刈りに大忙しの様子です。

昨年10月にカンボジアに渡り、こちらで暮らしながらスロラニユのプロジェクトの活動を始めて1年が経過しました。活動を始めた当初は、彼らを支える社会的な仕組みが何らない中、様々な困難に直面する彼らの状況を目の当たりにし、打ちひしがれる思いばかりが募りました。しかしながら、一年を通じて毎週一度の定例の家庭訪問をはじめ、時にはご飯をご馳走になったり、休みの日のお出かけにお誘いを頂いたり、或いは「何か日本食を作ってよ」とリクエストを頂いたり。

彼らの生活に入り込み、一部を共有することで、決して物質的、経済的に「豊か」ではないものの、心穏やかに、たくましく、しなやかに「どっこい生き抜く」エネルギーの大きさに、刺激を受け、励まされる日々です。「支援」等とは何ともおこがましく、自身の活動の源となり、人生の糧となっていることに気づきます。

この1年間の活動の一部ではありますが、ご報告させていただきたいと思います。

まずは、ご本人、ご家族との信頼関係を深めながら活動を続けることを大切にしてきました。

毎週一度、定期的に家庭訪問をさせていただき、ご本人の障がい状況等をわかりやすくお伝えし、積極的にコミュニケーションを図ることを心がける中で、ご本人、ご家族から成育歴や生活環境、近況や体調、現状で抱える不安やニーズを丁寧に聞き取り、必要な現物支援などのサポートに繋がります。

また、この一年の間に新たに10名の子ども達とも出会いました。支援児のみなさんのご家族、ご親戚、或いは村の方から情報を頂き所在を探りながら訪問させていただくのですが、ある日突然の見ず知らずの日本人の訪問に皆さん驚かれ、もちろん警戒もされます。しかしながら、同じプロセスを辿ることで徐々に信頼関係を構築することが出来ます。毎週の訪問を楽しみに待っていただいているご家庭も多く、本当にありがたい限りです。

次にご家族を含め、彼らの生活環境をより安心して暮らしやすいように整えることを心がけてきました。

紙おむつを定期的にお届けする事をはじめ、車椅子のお届け、車椅子だけではなく、自宅玄関へのスロープの設置や洋式トイレの設置等の環境整備等を通じて、ご家族の介護負担の軽減や、ご本人の日常生活における自立度を高め、少しでも彼らが目にする世界を広げることを目的としています。

14年間ほぼ寝かせられっ切りであった脳性麻痺の男の子に車椅子をお届けし、車椅子に乗ってはじめてお家の外に出た時の笑顔と歓声は忘れることが出来ません。それまでの彼の視界に入るのはお家の床と天井ばかり、車椅子に乗ることで視点が変わり、外に出ることで世界が広がります。彼は毎朝、車椅子に乗って、お母様と一緒に自宅近隣の散歩が日課になったとのこと。加えて、奈良の総合診療医の喜多野先生という力強い味方を得て、3か月に一度定期的にカンボジアを訪問していただき、支援児、ご家族へ医療の提供、疾病等の診断、治療等の活動を続けています。時にはリアルタイムでのオンライン診療にも対応していただき、ご本人、ご家族の安心感は大きなものです。診断さえつかず、長年、頻繁に起こるてんかん発作に苦しみ、ご家族も不安を募らせていた支援児が喜多野先生の診断、処方により抗てんかん薬の服用を始めたところ、翌日から発作は抑制され、QOLが劇的に向上しました。



車椅子の必要な  
お子様に寄贈

カンボジアにおいても、まだまだ不十分ではありますが障がい児者を支える社会的な仕組みや制度が整いつつあります。

この11月からはいわゆる日本で言うところの「障がい者手帳制度」に類似した「障がい児者IDカード」登録の制度の全国的な運用が始まりました。その実効性は不透明なところではありますが一歩前進と言ったところでしょうか。

しかしながら、行政から何らの周知やアナウンスが無いに等しい事や、当事者、とりわけ農村部に暮らす彼らがそれらの情報にアクセスできない環境であることから、制度の運用が始まったものの「知っている当事者がほとんどいない」状況が生まれています。それらの仕組みや制度をわかりやすく彼らに伝え、申請等の手続きのサポート等もこれからの活動においては大切な視点となります。

今後に向けて取り組んでいきたいことを語ればきりがありません。10月のスロラニユメンバー訪問時に道筋をつけていただいた「デイサービス」の定例化。時には支援児たちを安全にお預かりし、ご両親を休める「レスパイト」的な取り組みの実施。

長期的には障がい児者を「社会で支える」仕組みづくり等々。日本とカンボジアの「違い」を深く理解することをさらに進め、カンボジアならではの方法を模索しながらの活動となりますが、彼らの笑顔に励まされながら、彼らに寄り添い、伴走型の活動を続けて行きたいと考えています。



障害児デイサービス



障害児を診察する  
喜多野ドクター（右）



障害児デイサービス  
取り組んだ後の集合写真